

Title	満洲日報社・安武誠子の戦後熊本日記：1946年8月6日～12月7日
Sub Title	満洲日報社・安武誠子の戦後熊本日記：1946年8月6日～12月7日 Manshu Nippo reporter Nobuko Yasutake's post-war Kumamoto diaries : August 6 to December 7, 1946
Author	安武, 誠子(Yasutake, Nobuko) 菅野, 智博(Kanno, Tomohiro) 甲賀, 真広(Koga, Masahiro) 西井, 麻里奈(Nishii, Marina) 加藤, 春千代(Kato, Haruchiyo)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2023
Jtitle	満洲の記憶 No.9 (2023. 12) ,p.1- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20231200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

満洲日報社・安武誠子の戦後熊本日記

——1946年8月6日～12月7日——

執筆：安武誠子

解題：菅野智博、甲賀真広

編集：甲賀真広、菅野智博、西井麻里奈、加藤春千代

解題

本日記は、「満洲国」（以下、括弧省略）において満洲日報社に勤務していた安武誠子（旧姓山口。以下、誠子とする）によるものである。日記本文を掲載するに先立ち、ここでは日記および関連資料について簡単に紹介し、掲載日記の内容を概観する。

1 日記および関連資料

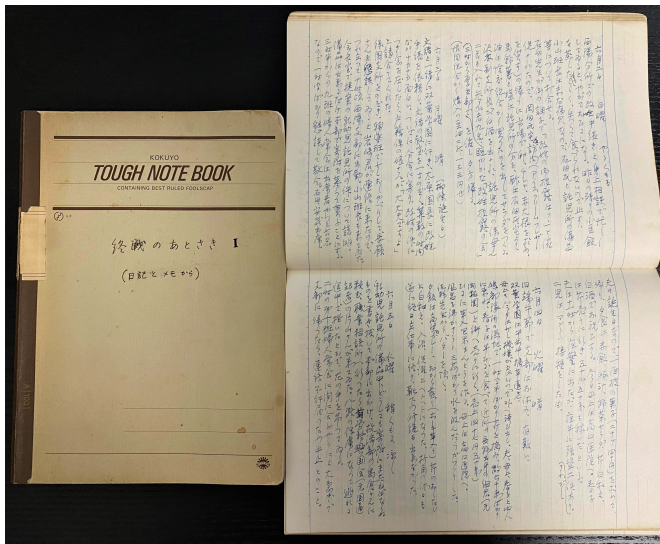
「満洲の記憶」研究会が当該日記と出会った経緯や著者・誠子の経歴などについては、佐藤仁史、菅野智博、大石茜、湯川真樹江、森巧、甲賀真広編『崩壊と復興の時代——戦後満洲日本人日記集』（東方書店、2022年）を参照されたい。ここでは、誠子の略歴と関連資料の概況を紹介する。

日記の著者である誠子は、1900年に熊本県で生まれ、東京女子大学卒業後、東京でのボランティアや福祉活動を経て、1926年に姉を頼りに渡満した。満洲では小学校の同級生であった安武柳條（以下、柳條とする）と結婚した。その後、柳條

の仕事の都合に合わせて満洲各都市を転々としながら、満洲国通信社や満洲日報社などで記者の職についていた。記者という職業柄により、誠子は日頃から日記帳を利用して取材のメモをとったり、日記をつけたりする習慣があった。

誠子の関連資料は、戦前と戦後に書かれた日記、1946年頃のメモ帳、回想録、写真の4つに大別できる。このうち、日記の満洲国期および日本に引揚げるまでの部分については、既にも掲『崩壊と復興の時代』に収録されている。メモ帳は、誠子が1946年4月から長春日本人会西陽地区会に勤務していた際に使用していたもので、当該時期の在満日本人救済活動に関する事柄がメモ書きされている。なお、メモ帳の内容も上述した日記集に収録されている。回想録『終戦のあとさき——日記とメモから』(大学ノート2冊)は、誠子が1980年代頃に当時の日記とメモ帳を起こしたものである(図1)。興味深いことに、回想録には補足情報として様々な事柄が加筆されている。これらの補足情報は、日記の深読みを手助けしてくれるばかりでなく、記憶としての満洲体験も含まれている。そして、写真には、満洲国期の各地で取材した様子や家族・同僚との写真の他に、戦後の家族写真、仕事関連の写真などが多数含まれている。

図1 回想録『終戦のあとさき——日記とメモから』



註：加藤春千代氏所蔵。

2 日本引揚げ前の生活

ここでは前掲『崩壊と復興の時代』の未読者や読了後から時間が経過した者などに考慮し、誠子一家の満洲国期および引揚げ前における状況を簡単に紹介する。なお、詳細な内容については、前掲『崩壊と復興の時代』を参照されたい。

1945年頃、誠子は満洲日報社の記者として働きながら、夫・柳條、次男・加藤春千代、3男・山口文緒、義母、遠縁の親戚・春子と一緒に新京で平穏に暮らしていた。ソ連軍侵攻に伴って一家は安東に避難し、その後数ヶ月にわたり同地で疎開生活を送ることとなった。途中、誠子1人で長春に一時的に帰ることもあったが、一家全員で戻ったのは1946年2月初旬のことである。長春に戻ってからは、誠子は長春西陽地区日本人会で日本人避難民の生活支援に携わっていた。そして、一家は1946年7月中旬に長春を出発し、ようやく日本への帰路についた。

図2 大連市郊外の公園での花見



註：左は柳條、中央の子どもは山口晶之介、抱きかかえている女性は誠子、右の和服の女性は柳條の母・ネイ。加藤春千代氏所蔵。

『崩壊と復興の時代』に収録されている満洲国期の日記には、誠子が各政府機の会見や懇親会に参加し関係者と交流したり、各教育機関へ取材したりした様子などが記されており、そこから満洲国崩壊前後の政府の動向や人々の生活の一端がうかがえる。また、日本敗戦後の日記からは、先の見えない引揚げに備えるための疎開生活への工夫や、開拓民を中心とする日本人避難民の現地避難生活が読み取れる。

図3 新京緑園住宅の前にて（1944年8月）



註：左は安武和子、中央後は柳條の母、中央前は加藤春千代、右後は山口晶之介、右前は山口文緒。加藤春千代氏所蔵。

3 本号の掲載分の内容

本号に収録した日記は、1946年8月から同年12月までの部分であり、誠子一家が故郷熊本に引揚げた後、誠子が生活を自立するための住居探しや、食糧調達、仕事への復帰、親族との付き合い、友人との交流などが記されている。上述した日記集のテーマは満洲国崩壊前後から日本に引揚げるまでの記録としていたため、引揚げ後の部分を除外していた。しかし、引揚げ後の日記は引揚者の生活再建を知るための重要な手がかりとなる。そこで、本号より数回に分けて、「引揚げ後の生活記録」として日記の続きを『満洲の記憶』に掲載する予定である。以下では本号に掲載する内容をもう少し詳しく見ると同時に、編集者の関心に引き寄せて2、3の興味深い点を指摘する。

誠子一家は1946年7月26日に仙崎港に上陸し、7月28日に誠子の実家（熊本県菊池郡）に辿り着いた。実家到着直後から8月6日までの分が記されていないのは、おそらく定住に向けての準備などで相当忙しかったからであろう。引揚げた後から2週間近く経過した8月14日に、誠子は仕事を求めて引揚者連盟を訪れたことが、日記では「自分は引揚者連盟に行く。連盟、就職斡旋係の古川氏という人に会って」と記されている。また、誠子は8月31日に古川氏に会うために再び連盟まで出かけたが、面会できなかつたため直接同氏の自宅まで訪問したという。ここからは誠子がいち早く仕事を再開させたかったという強い気持ちを読み取れよう。

かかる状況の中で、誠子はようやく同年10月1日付けで「熊本県海外引揚者罹災者救済会の婦人部長として、『熊本バック』記者として、働く事」となり、仕事の第一歩を踏み出した。残念ながら『熊本バック』のバックナンバーが管見の限り各機関に保存されていないため、同誌がいつからいつまで刊行され、どのような内容が掲載されていたのかなど、その全体像を把握するのは困難である。唯一確認できるのは、国立国会図書館の憲政資料室に所蔵されている「昭和22年新年号」であり、その記事目録は下表の通りである。著者を明記していない記事が多く、実際誠子がどの記事を直接に執筆したかは特定することが難しい。ただし、本日記の中で記されている誠子が白川校に作品を依頼しに行っている様子（10月5日）や、熊本商業に高等学校にて甲斐波奈子を取材している様子（11月24日）、11月15日に荒木啓子と林トミ子美容師を取材している様子などを総合すれば、当該号の中に

ある「野球選手は少年期から白川校の倉重剛君」、「現代麗人頑張りの記」（荒木啓子や甲斐波奈子などの取材記事）、「美容のSOS」なども誠子が関わっていた可能性が高い。また、同誌の表紙が漫画家の山川哲に依頼している様子も日記からうかがえる（図4）。一方で、同誌に掲載されている数多くの広告と10月22日の日記『「広告をとれ」と言う。不愉快だから、広告とりを口実に部屋探し」から、雑誌の刊行には多くの資金が必要であり、その資金調達に記者の誠子が動員されていたことが読み取れる。そして、「不愉快」という吐露からも推察されるように、満洲で取材に専念していた誠子にとって、この営業のような仕事は極めて苦痛であった。

図4 『熊本パック』昭和22年新年号の表紙



註：表紙のタイトルは「開農の春」、作者は山川哲。

『熊本パック』1947年新年号の記事目録

記事名	著者
闇米の退治には石炭が妙薬を御存知か	永島始（熊本県海外引揚者罹災者救済会長、熊本パック社社長）
野球選手は少年期から白川校の倉重剛君——少年球界の麒麟児ものがたり	不明
新税ものがたり——五大都市財務主管者協議会のおえら方にも申す	不明
熊本駅前闇市風景を描く	不明
観光都熊本をあるくの記	不明
名士一言素描	不明
熊本の名物男——万年四十男猛活躍『酋長の娘』公開記	不明
現代麗人頑張りの記	不明
熊本で拾ったよもやま話	不明
平和帽の作り方	バラミ洋服店杉本兼房氏
美容のSOS——輝く素肌の美しさを	林トミ子氏談
探偵小説——消えた黒子（一）	竹森雪温
熊本よい児の作品集	不明
肥後狂句	竹原竹山
読者の声	不明
読者俳壇	不明
編集後記	竹森生

次に他の家族成員の状況について見てみる。夫の柳條は満洲で電信関連の仕事に携わり、敗戦時新京電波監視局長として在職していたが、帰国後は就農しようとしていた。そのために、日記には柳條がしばしば開拓地を探していた様子が書かれている。例えば、8月29日に大谷、小川の山の方へ引揚者のための開墾地を下見に行ったり、9月2日に官林払下げ方について営林署を訪問したり、9月5日にも官林払下げの件で隈府に行ったりしていた。一方で、2人の子ども（春千代、文緒）は転入手続きを経て、9月16日から学校（碩台小学校）に通い始めている。

また興味深いことに、日記には他の満洲引揚者もしばしば登場している。誠子が引揚者連盟を訪問した際に「敷島高女家政科出身で、関東局に勤めていた福森さん」と会い、また「シカさんの遺児総子さんが、赤ちゃんを連れて来た。鞍山引揚組の由」という記述もある。さらには「元満日の遠藤君、岐部さんと来訪、10時頃まで歓談」とあるように満洲日報社の同僚とも会っていたようである。他にも、

安武家の親戚で、安東から引揚げた藤田一家も度々日記に出てくる。

以上のように、日記からは誠子一家の熊本での生活がどのように始まっていったかが読み取れる。満洲国末期の日記は「記者の日記」としての色合いが強く、戦後に安東や長春で避難していた時期の日記は「疎開生活の記録」という性格が色濃い。これらと比較して、本号で掲載する引揚げ後の日記は「引揚げ後の生活記録」という性質を帯びている。そこには家庭内の出来事や親族との付き合い、仕事など極めて些細な日常記録も多く含まれている。

日記から垣間見られる誠子が日本の地方における古いしきたりに対する困惑や、仕事・生活に対する苦悩は、まさに一満洲引揚者家族の戦後の歩みを表しており、満洲と熊本という異なる風土や生活空間を体験した誠子だからこそ感じとれたものであろう。それはまた当時の多くの引揚者に共通する苦労でもあったといえよう。長年現地で築いてきた生活基盤や財産をすべて失った引揚者らは、引揚げ後も先行き不透明の中で常に悩みや不安を抱えながら日常生活を過ごしていた。このような状況の中で、引揚者はいかに生活を再建し、その過程においてこれまでの人的ネットワークをどのように利用しようとしていたのか、今後さらに検討する必要がある。誠子の日記は、その考察の一手がかりをもたらしてくれるだろう。

最後になるが、前掲『崩壊と復興の時代』の収録部分に加えて、本号分の掲載についても誠子のご子息である加藤春千代氏に多大なご助力をいただいた。加藤氏のご同意やご協力がなければ、貴重な日記を世に送り出すことができなかった。この場をお借りして、加藤氏に衷心からの謝意を示したい。

凡例

- ・以下には日記の1946年8月6日から同年12月7日分を収録する。
- ・日記原本は所在不明のため、翻刻は安武誠子のご子息加藤春千代氏によるものを収録した。なお、明らかな誤字は編集者が修正した。
- ・日記は縦書きで書かれているが、読みやすさを考慮し、横書きにした。
- ・記載のない日については除外した。
- ・1日の日記は、トピック（箇条書き）と本文という構成になっている。このトピックはポイントを落として表記している。
- ・日記の旧字体や異体字は常用漢字に変換し、漢数字も算用数字に改めた。旧仮名遣いは原本通り掲載した。また、読みやすさを考慮し、句読点を付した。
- ・日記本文中の〔 〕は編集者による補足説明である。
- ・◎などの記号は原文の通りに記載した。
- ・以下は、語彙註釈の作成にあたって参考にした文献の一覧である。なお、家族や親戚、友人らについては、加藤氏へ行ったインタビューに基づいている。また、適宜、回想ノートも参照した。

貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年。

日外アソシエーツ株式会社編『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年。

芳賀登ら編『日本人物情報大系』第10、15、30、39巻、皓星社、1999 - 2000年。

日記本文

8月6日（火）

晶之介¹、来る

8月9日（金）

義象²、初命日

8月10日（土）雨

伊萩へ引越し

宮下の安武凡夫氏宅の空き土蔵を手直しして、暫時借用

8月13日（火）

熊本へ谷山氏³宅へ泊る

浩⁴、紀⁵、両君は北九州へ旅行中

8月14日（水）

引揚者連盟へ（福森嬢⁶に会う）

築山先生⁷、訪問

早朝、晶之介は熊本駅へ切符買いに。自分は引揚者連盟に行く。連盟、就職斡旋係の古川氏という人に会っていろいろ話をしていると、突然、横合いから懐かしそうに言葉を掛けて来たのは、敷島高女家政科出身で、関東局に勤めていた福森さんだった。思いがけぬ嬉しさだった。

お昼からみどりさんと晶之介と3人で街へ買物に出掛け、途中から分れて、築山先生をお訪ねする。

8月15日（木）

停戦1周年記念日

京町、高浜氏⁸宅訪問

晶之介と京町の貞子さんを訪ねる。

久しぶりだが、変わらぬ心からの歓待に晶之介も居心地良い様子。お昼飯に「うなぎ」をご馳走になり、電熱器の部品等買いに街へ出て、夕方帰る。

夜、宏、紀君、帰り来り、賑し。

晶之介の携帯食糧等拵えながら、和やかに賑やかな一夜だった。

8月16日（金）

晶之介、東京へ帰る、上熊本駅見送り

菊池へ（高江下車）

8月28日（水）

昼頃、夫、諭吉氏⁹同伴、帰る

◎夕刻（5時半頃）、朔郎¹⁰、椿事を引き起こす、この夜、通知無く、賑やかな一夜を過ごす

8月29日（木）

夫、諭吉、春千代、大谷、小川の山へ行く、開墾地物色

岩本へ行く途中、椿事を聞く、朔郎の車とすれ違う

午後、嫂と隈府へ

夕方、熊本へ行き、小野方へ泊る

8月30日（金）

喜寿伯母、正月命日、溜子¹¹、杏子¹²と一緒に墓参

引揚者連盟へ回る後、熊本日日、西日本、各社へ朔郎の記事差し止め依頼

坪井へ回り、京町高浜氏宅に泊る

8月31日（土）雨

朝早く、厚子さんは阿蘇へ。

連盟に行ったが、古川氏が見えぬので九品寺の同氏宅を訪ね、坪井へ帰り、4時過ぎの電車で高江から伊萩へ。雨は降るし、路は真っ暗で、随分ひどかった。

9月1日(日)

朝から巖¹³、来訪。みどりさん¹⁴に反省の色見えぬどころか、出て行けと言うので、出ると言う。止めて見たが、駄目らしい。鞍岳に行くと言う。

母上、夕刻から文緒を連れて岩本(おていさん方)に道具祝いに(泊りがけ)。

9月2日(月)

諭吉さん、帰る。柳條、大津迄同道(営林署、官林払下げ方出願の件)。

夕刻、みどりさん来る。明日、先祖供養をするとの事。

9月3日(火) 雨

昨日、巖の事でみどりさんの反省を求め、怒らせて帰したが、先祖供養とあれば、止むを得ず、岩本へ上る。お天気が悪く、嫂は不在。実記さん¹⁵とここで、58歳の兄(政男?)、義兄等に挨拶す。

9月4日(水)

岩本にて先祖供養(杉水のお大師坊さん来る)。釈然としないが、早朝からみどりさんが招びに来たので、2児を連れて出掛ける。

9月5日(木) 晴

9時頃から熊本へ、引揚者連盟、新興新聞

谷山氏宅に泊る

夫は朝から隈府行き(官林払下の件)。

9月6日(金)

裁判所(佐藤判事)、朔郎に面会

高江乗換え、隈府へ五八さんの姉(旧岩根)いま氏宅訪問、暮れて帰る

9月7日（土）

村役場

午後、米穀配給を取りに行く、米1割（救国米1割引）、甘藷3割（これは後）、小麦・大豆5割
夕刻、実家へ布団を貰いに行く。

9月9日（月）

熊本へ（高江から）夫、2児同伴

正義氏、手車にて荷物を運搬して下さる

12時過ぎの電車にて立町下車、小野宅に泊る

9月10日（火）

夫、早朝（4時頃）上熊本駅へ

市役所に寄留届、配給、転入学の手続き等をしに行く

午後、2児と白川に遊ぶ

9月11日（水）

市役所へ配給手続、早く済んだので、大学病院へ（春千代受診）

藤崎宮大祭始まる、今日より15日まで

9月12日（木）

2児を伴い、京町高浜氏訪問

貞子さんを誘い出して、島崎谷山氏宅を訪問、夕刻帰宅

夫、来る

留守に嫂も来たりし由

朔郎、昨日、保釈にて村へ帰ったとの事。何にしても良かった。

公判は来月だろう。

9月13日（金）

春千代と大学病院へ

午後、ミラー氏¹⁶宅に遠山先生¹⁷を訪問

9月14日（土）

市役所（学務課）で転入学の手続を了す
すぐ引き返し、2児同伴、碩台校へ行き、転入手続き
午後、柳行李の代りに竹行李（大42円）を求む

9月15日（日）

藤崎宮本祭
早朝、神幸を拝す
2児と神社参拝
午後、文緒と高浜氏を訪問
行李に貼る紙やふりかけを頂いて帰る

9月16日（月）晴

朝、2児に付いて碩台校に行き、2時間観て帰る
午後、行李を貼ったりしていると、夫、来る

9月17日（火）

夫、5:00の列車で袋へ、上熊本駅まで見送る
2児は元気良く、登校
初めての隣保配給は手拭い

9月21日（土）

午後、2児同伴（高江下車）菊池へ、日暮れ方、帰着

9月22日（日）

午後3時、霧雨の中を隈府から熊本へ

9月23日（月）

朝、永島氏¹⁸宅訪問
平山氏と会い、県庁、市役所へ

午後、文緒を連れて高浜氏訪問

9月24日（火）

杏子さんと小島の古庄氏宅へ

留守中、柳條来たりし由

夜、吉田組長氏宅（長男戦死お悔やみ）

工藤氏宅へ（長女、49日）

9月25日（水）雨

総子さん水俣より帰る

夕方、永島氏宅を訪問

夜来の雨いよいよよしげし。

子供達は傘も無く、合羽だけで登校。長靴と傘が欲しいなあとつくづく思う。家の中は暗い。仏間はなお暗いが、繕い物などする。

シカさんの遺児総子さんが、赤ちゃんを連れて来た。鞍山引揚組の由。

すっかり嫌になるほど降った雨も夕方小止みとなったので、文坊と永島氏宅に立寄り、バイヤスを買って、見性寺境内を覗いて帰る。

夜、夫と小島に便りす。

9月26日（木）雨

朝、小島（古庄きく氏）と夫へ、郵便を出す

永島氏宅

午後、第2高女、大塩氏宅を訪問

恐ろしく蒸し暑い日

雨模様でうとうしい。

永島さんへ行ったら、奥さんが買い物に行くので、留守居をして欲しいと言う。お昼近くまで居て、お掃除等してやる。

午後、春千代は絵を描きに再び登校したので、文坊と内坪井から坊主町の大塩さん宅へ回って帰る。

春千代、暮れて帰る。熊日社の出品画審査の件、予選に名入りし由（組より10名）。

9月27日（金）雨

午前中、永島氏訪問

岩橋総子さん帰る（千葉の和洋裁へ行く為）

永島氏の三光様式が愈々ものになりそうで、みんな張り切っている。

春日北岡神社の満洲引揚者連盟？を覗こうと思ったが、豪雨で中止する。午後は専ら裁縫。

9月28日（土）雨

早朝から北岡神社、尚綱高女¹⁹へ回る

永田喜久先生に会い、築山先生宅でご馳走になる

9月29日（日）

三好みよさん、貞子さん宅へ

夜、小原氏宅へ

2児とも画の会で水前寺へ行く。

午後、文緒と京町高浜氏宅へ行ったら、丁度、万寿雄さんが復員して帰ったところ。永島氏宅に寄り、打合せす。

9月30日（月）

朝から永島氏宅へ行ったが、『熊本パック』をやろうという相棒が来ていない。然も、奥さんの長男の百ヶ日とかで変にゴタついているので、失敬して帰る。

午後、また出掛けて見たら、主筆の竹森氏²⁰、編集員の青木氏も来ている。3人で『熊本パック』の創刊について熟議。紙面の割当等を研究する。

10月1日（火）晴

◎初出勤、『熊本パック』創刊準備

9時頃出勤。

熊本県海外引揚者罹災者救済会の婦人部長として、『熊本パック』記者として、働く事とし、永島会長、谷田、竹森、青木氏等と、いろいろ協議する。

仕事には先ず名刺をと、第1印刷所へ頼みに行き（百枚18円）。4時過ぎ家へ帰る。

伊萩から「カズコイコツカエッタ、スグコイ」との電有り。あまり遅いので、明朝行く事として、早くやすむ。

10月2日（水）晴

2児を連れて菊池（高永）

和子さん²¹、銃殺さるとの事、慄然とす

午後、伊萩へ行くと、論吉さん来ている

夜伽する

7時過ぎの電車で高江へ行く。途中、永島氏へ寄り、ことわっておく。

11時過ぎ、高永着。夫も母上も先程、伊萩へ帰られたとの事。

和子さんの思いもかけぬ死を聞き、律姉さん²²の心中が傷ましくて慰めの言葉も無い。明日、葬儀との事。

午後、伊萩へ行くと、論吉さんが来ている。安東のお父さんも6月頃、逝去されたらしい。

お母さんは馬鹿に機嫌が悪い。夜、夫と2人で夜伽に行き、真夜中に帰る。

10月3日（木）小雨

和子さん葬儀、午後4時

高江より熊本へ帰る

白米の祟りか、3人ともお腹具合悪く

夜半、文緒、嘔吐す

小雨降る。お昼飯を早く済まして、論吉、夫、2児と連れ立って高永へ行く。途中、雨に会う。

4時の葬儀までに大分間が有るし、皆きちんとした紋付姿の中に、モンペも一寸具合悪いので、2児とお宮へ行き銀杏を拾う。

葬儀が済み、大急ぎでお斎を頂き、夕暮れの小雨の道を高江へ。8時近い電車で漸く帰る。

10月4日（金）曇後晴

9時出勤、出勤簿を捺す

理事に推薦さる

文化協会、山川スタジオ、武本婦人服店等を回る

事務所へ行くと、もう竹森さんは来ている。名刺も出来ていた。永島さんが私を理事に推すと言う。婦人部長、理事と、肩書だけは大了なものだ。併し、救済会もいよいよこれからだ。しっかりやろう。

11 時頃から青木さんと、文化協会の西村氏（市議）を訪ねた。雨上がりでひどく寒いので、家へ帰り着替えして、出掛ける。

午後はまた青木さんと、山川哲さん²³、武本等を訪ね、5 時頃、家へ帰る。

10 月 5 日（土）晴

午前中、碩台校、白川校（作品依頼）

築山先生宅

午後、2 児同伴、島崎へ（島崎校）、谷山氏宅へ泊る

『熊本バック』に載せる為、児童の作品を頼みに行く。2 校が早く済んだので、築山先生に就職の報告をして社へ帰り、島崎へ行くからと、早く退社。2 児を伴って、上熊本から市電で島崎へ行く。みんな喜んで迎えてくれた。みどりさん行き違いで、竹部を訊ねてくれた由。

島崎校に作品を頼み、夜はいろいろ話などする。

10 月 6 日（日）曇

午後、野球国民学校対抗（優勝戦）

9 時過ぎ、島崎に暇乞いして、途中京町に寄る。貞子さんは私の就職依頼の為、礼拝に出たとの事。帰りが遅いので失礼して、一旦、竹部に帰り、2 児を連れ、雨具を持って球場へ行く。

壺川 7 - 2 で花園を破る。

10 月 7 日（月）晴

朗郎公判、佐藤裁判長、大竹（？）検事、打出弁護士

午後、壺川校（作品依頼）

夜、春千代の地図描きを手伝って、遅くなった

早く家を出て、社に顔を出し、壺川校に作品を頼んで、大急ぎで公判廷へ駆け付けたら、小1時間待たされた。みどりさんは証人として、みどりさんの兄と弟（達也）と、みどりさんの従妹ちがいかい小野さんという奥さんも来ている。

公判は願った通り佐藤裁判長。極めて同情に満ちた公判。検事の論告も長かったし、弁護士もしっかりやってくれた。ただ証人台のみどりさんにも、少し慎ましやかな態度が欲しかった。

帰途、貞子さん宅で弁当を済まし、武本（婦人服店）に寄って、杉本さんに原稿を依頼して帰る。

10月8日（火）晴

小山氏宅、美髪学校、清水高女

夜、春千代の地図を描く

永島夫人の機嫌が良いので、こちらの気まで軽くなる。午前中、徳永氏を連れて小山氏宅を訪ねると、「午後、来てくれ」との事。美髪学校の加藤さんも、丁度忙しそうだし、清水高女のエカード女史²⁴も留守。やっと、小山さんに会っただけだった。

10月9日（水）曇

清水高女

午後、熊本市授産場

青木さんと一緒に10時頃、エカード女史を訪問。会うには会えたが、来週の月曜（11時頃）にしてくれとの事。あまり何べんも無駄足して、ガッカリする。

午後、市の授産場に行き、いろいろ話を聞いて帰る。

10月10日（木）雨

市川寿美蔵²⁵訪問（松の井旅館）

夜、東坪井小野氏宅訪問

夫、来る

母上の正月命日

寿美蔵を訪ねて、研屋旅館へ行ったら、何処かへ転宿したとの事。大和屋へ行って尋ねると、東阿弥陀寺の松の井旅館だと言う。寿美蔵さん、機嫌良く会ってくれた

が、大分年寄り、真っ白だ。歌舞伎の行き方について20分ばかり話を聞いて、帰る。夕方から雨。春坊、文坊を連れて小野氏（元八百屋）に行き、嫂や朔ちゃんと話をして帰ったら、8時頃、夫が濡れ鼠になって来た。

10月11日（金）

朔郎公判

子供達を学校へ送り出し、夫と京町へ行く（貞子さんに頼まれた米の事で）、帰りに裁判所を覗いたが、判決言渡しが遅びてお昼頃になったので、みどりさん達に挨拶して帰る。夫を広町に見送り、母上におみやげ（あさり貝）を頼む。お昼過ぎ、小野さん宅に朔郎達を訪ねると、やはり懲役2年、執行猶予3年になった由。

10月12日（土）晴

文緒誕生日

10月13日（日）晴

上林高女、オカッパ盟体続く（10日より）

黒髪校区引揚者会

三年坂教会の礼拝に寄る（聖餐式）

引揚者会、9時からというので出掛けたが、大分待たされ、その上あまり思わしくない会なので、途中から教会へ回る。聖餐式だが、大した感激も覚えず。

10月14日（月）

城西校行き

谷山氏宅へ寄る。城西校の作品は未だ出来ていなかった。

10月15日（火）

夕方帰ったら、文緒が空腹で泣いていた

10月16日（水）

夕方、夫、永田弘人氏を連れて来る（米を持参）

昨日、文緒に泣かれて弱ったので、おやつだけでも用意してやりたいと、永島夫人に頼んでお芋を焼かせて貰った。

ああ、何とかして早く部屋を探して、自炊したい。

10月17日（木）

神嘗祭

日の丸、所々に翻る、マ司令部より掲揚許可有りしと言う

午前10時より、長與善郎氏²⁶講話

午後、島崎登山

三賢堂帰り、文緒行先不明にて気を揉む

重成さん帰還（家族5人）

神嘗祭だが、お休みでないので9時出勤。2児を連れて京町へ寄る。長與氏の講演に貞子さんを連れて行こうと思ったが、家族揃っての休日なので、見合わず。2児は島崎へ、独りで第1の講演会場に行く。

お昼迄かかったので、青木君と島崎へ行こうとしていると、宮原さん（尚綱高女の英語の先生）が追いかけて来た。青木さんは三賢堂へ。宮原さんと私は谷山（築山）宅へ。島崎町内会の運動会で、城西校は大変な賑わいだ。

午後、三賢堂へ行き、安達雪子夫人に会う。帰りに文緒、行先不明で大分心配したら、独りで家に帰っていた。

シゲナリさんが平壤から帰られた。末児を失われた由。

10月18日（金）

『熊本バック』原稿締め切り

10月19日（土）

児等、運動会のけいこにて授業無し。

いわし（百匁7円）を買い、焼芋と一緒に焼いて、おやつにする。

午後、子等と一緒に遠山、川瀬²⁷両氏を訪ね、九学の中で野球を観て帰る。

10月20日(日)晴

杏子さんと礼拝に出る(伊藤牧師の説教)。お昼から洗濯や裁縫。久しぶりに2児等も家居す。

10月21日(月)

健敏氏、厚子さんに長子生まる

協同民主党山本実彦²⁸(中央委員長)、大橋喜美子代議士²⁹等の講演を聞きに行く

10月22日(火) やや曇

赤ちゃん死亡

電産、配電等のゼネストで何べんも停電す

葉子さん、百ケ日

昨夜、晩く迄赤ちゃんの襦袢など縫ったが、今朝も早くから綿入れを縫う。

「広告をとれ」と言う。不愉快だから、広告とりを口実に部屋探しをして、東坪井小野氏を訪ねると、大津の高野さん(嫂の妹婿)が来ていた。

午後、京町へ行き、岐部さんの貸家(貞子さんの前の家)の一間を借りられるよう、交渉方を頼んで、夕方帰って見ると、赤ちゃんが死んでいた。夜、入棺す。百ケ日にて、いろいろご馳走あり。

10月23日(水)晴

碩台校運動会

夫、来る、島崎へ行く

8時出勤、判だけ捺して、碩台へ行く。文緒(4年男子)の徒歩がトップ。少し見て、バック社へ帰り、芋を焼いたり、牛乳を頼みに行ったりして、つぶす。

正午、子等と昼飯を開いていると、夫がやって来て、団子、米のお握り、お煮しめ、栗等、いろいろ持って来てくれた。2児の分だけ見て、島崎へ行き、暫く邪魔して坪井へ帰る。

10月24日(木)晴

夫と町を廻る(海産物等を見る)

朝市辺りで仕入れ物をしたいと言う夫と同道。判だけ捺して、朝市へ回る。思うような物も無く、とうとう熊本駅まで行く。

駅前の闇市、お芋、茹で卵、オニギリ等、なかなか賑やかだ。

北岡神社境内でお昼飯を開き、また上通町へ引き返す。母上へのおみやげに鼻折れ鯛1尾(70匁位)ことづける。社へ帰ったが、殆ど仕事にならず。

10月25日(金)晴

午前10時より、社会党演説会(歌舞伎座)

演説会は1円の入場料(新聞代)を取っていたが、大入り満員、山下ツネさん³⁰の自己宣伝は嫌気が差したが、山崎道子さんは大したもの。片山委員長も、銜い気が無くて好感が持てた。

10月26日(土)晴

午後、2児と菊池へ

午前中は切符買い(土曜で例によって大変な人出だ)や、みやげ(あさり貝、菊とダリアは和子氏霊前へ)求めにつぶし、お昼に永島さんとこで、お芋を焼き、おやつにする。大分待ったが、子供達が来ない。やっと2時の間に合う。高江で降り、高永に寄って、暮れ方帰宅。誰も居ない、戸が締ってある。仕方が無いので、勝手に御飯を炊いて、3人で食事している所へ、夫が熊本から帰って来た。母上はおていさんところへ、手伝い方々行かれた由。

10月27日(日)曇

また曇っている。ご飯を済まして、岩本へ行く。猛さんのお悔やみを言うつもりだったが、留守。おていさんところで母上に会い、昼飯をご馳走になる。みどり嫂、朔郎ともに不在。熊本へ行った模様。

昼過ぎ伊萩へ帰る。食器少し、炭、味噌少し。おていさんに貰った木炭等を背負って、2時頃、家を出る。隈府は寺町は素通りして、5時過ぎの電車で坪井へ帰る。鎮中、第2高女の運動会でお風呂が沸いていた。ぬるいお湯で、感冒を引き込んだらしい。

10月28日(月)晴

大掃除

京町の貞子さん宅へ引っ越す事とし、夕方、荷物を少し運ぶ。

10月29日(火)

宮原さんと島崎へ行く。みどりさんと3人で、同級会の打合せをして、夕方帰る。往復歩いて、大分疲れた。

10月30日(水)

夜、健三氏夫妻、元昭君、カブキへ

なべ37円、火箸1円25銭、たわし1円50銭、しゃもじ2円10銭、さじ(2)2円

サラリーが出ないので、買物に困るが、なべ、火箸、たわし、しゃもじ等を買ひ、夕方、子等と京町へ運ぶ。何もかもあまり高価で、困ったもの。

10月31日(木)

サラリー、やっと夕方300円貰う、約束の半分だが、没有法子〔仕方ないの意〕だ
京町へ引っ越す

夫、晶坊等へ便りす。引越は楽し、だが、荷車引きは大変、汗ビッシヨリになった

たくあん2円60銭、つけあみ(百匁)15円、いりこ(50匁)10円50銭、大根1円50銭

朝出社したが、なかなかサラリーが出そうも無いので、買物に廻る。

宮原さんに庖丁を、上通の緒方さんに蒸し鍋、まな板、茶碗(2ケ)、皿(2ケ)を貰う。明日の食事のため、たくあん、つけあみ、いりこ、大根等を求める。

午後、吉原さんに手車を借りて荷物を運んでいたら、瀬戸坂の途中で車輪が取れて、困った。止む無く、貞子さんとのこの乳母車を借りて載せて、小野宅へ帰り、夕食後残りの荷を、乳母車で運んでいたら、また輪が取れて困った。ザッと部屋を片付けて、晶之介や夫に手紙を書いてやすむ。

11月1日(金)晴

ざる(中)6円50銭、はなおれ7円、たわし(2ケ)1円、うちわ(1本)2円50銭、手提(1ケ)10円、焚付け(硫黄)1円、マッチすり80銭

貞子さんのお宅で朝飯をご馳走になり、お弁当まで拵えて頂いて、2児と一緒に家を出る。一寸社へ顔を出しただけ。ざるだの、たわし、魚（はなおれ）等を、買って歩き、早目に帰って、お夕飯の仕度をする。芋入りのご飯、内地へ帰って以来の鯛（はなおれなれど）の煮付で、2児とも満腹。水が出ないので、後しまいを明朝に延ばして、早くやすむ。

11月2日（土）晴

夫、来る

里芋（300匁）6円60銭、ほーれん草3円、たくあん2円50銭、青し柿（特価400匁）9円、人参（1把）4円60銭、大根1円30銭、酒（特配2合）6円、ビール（特配1本）6円、魚（配給アマダイ200匁余り）3円84銭

米の配給が取れそうなので、貞子さんと並んで居たが、大変な行列なので、貞子さんと満寿夫さんに頼んで遅く出勤する。今日も殆ど、物資獲得に費やす。昼頃、文緒が社へ来たので、一緒に食事を済まし、買物に回る。明日の誕生日は、貞子さんがお昼のお弁当をご馳走するとの事なので、何か1品でも自祝の印しをと思ったら、何と青し柿の奉仕品があって、助かった。普通、市価6～7円というのに、これなら半値以下だ。

帰って見たら、夫が来ていた。夕方、明日の新憲法公布の祝に酒、ビールの特配があったので、夫は大喜びだった。

11月3日（日）晴夕刻曇る

明治節、新憲法公布

熊本師範付属運動会

総合美術展（入場料1円）見学

夜、高浜氏宅へ

誕生日と言ってもちっとも嬉しくない。新憲法公布の日と言うが、敗戦の民の心は浮かず。おまけに、昨夜、布団不足で寝冷えした為か、頭が重く、ゾクゾクする。でも、貞子さんは朝から御馳走作りに忙しそうだし、折角の招待を断るのも悪いので、2児が学校から帰るのを待って、師範の運動会へ行く。夫も同伴す。昼まで見たが、師範学生のあまりくどい応援団や仮装行列（夜の鶯等々）に、いさ

さか嫌気が差したので、昼頃から夫と美術展へ行く。相当力作も有るが、この前見た文展と見比べては、やはり貧弱なもの。

帰りは千葉城下から歩いて帰ったが、ひどく疲労を感じた。夜、新米2合5勺炊いて、昨日の残りの魚で自祝す。

11月4日（月）雨

夜明け前からの雨

欠勤、発熱

米と麦粉12円85銭

昨日から具合が悪いと思ったら、朝から8度以上の熱。フラフラするし、雨も降っているので欠勤する事にしたが、ご飯だけは自分で炊いて、児等を送り出す。

夫、社への電話かけ、米穀配給受取、野菜買出し等をしてくれて助かる。

午後、9度2分で、大分苦しかったので、春千代に雑炊を炊いて貰った。夫、泊る。

11月5日（火）

出勤

高浜氏、今日より旅行

遠藤君来る（とても太ってる）

高浜氏宅へ泊る

さつま芋（2貫）30円、配給まき（4把）13円40銭、たくあん（1本）1円91銭、大根（1本）1円98銭、洋服仕立（スーツ）34円40銭

朝、7度8分まだフラフラするが、食糧、燃料等の仕入れもあるので、出掛ける。一度出社して、夫と同道、唐人町の『味噌醤油新聞』と言うのに行って見たが、駄目。途中で夫と別れ、黒髪校に児童作品の事で出掛け、竹部に寄る。丁度、「肥波みおじさん」が野菜を持って来ていたので、無理に談じ込んで、2貫分けて貰う。午後から手取本町の授産所、社会事業協会等へ行き、社へ寄って夕方帰る。元満日の遠藤君、岐部さんと来訪、10時頃まで歓談。

11月6日（水）曇

昼頃出社

たどん（2把）7円38銭、めざし（100匁）21円、小ざる（1ヶ）4円40銭、春千代学用品等10円、代用メン2円、天ぷら（2枚）4円

未だサッパリしない。遠藤さんも来ているし、気分も晴れぬので、11時近くまで貞子さんとこで話し込んで、やっと出勤。12号の雑誌記事に、パラミ洋装店（アツプリケ）1つ回っただけ。「名物男」、「名物女」、そんなものを緒方さんに尋ねたが、分らぬ。

4時、退社。東坪井の小野さん（八百屋）に寄って、たどんを少し分けて貰って帰る。夕食頃、また高浜氏宅へ、遠藤氏が舞い戻って来た。話に來いと事。子等と出掛け、つい話に興が乗って、帰ったのは11時、日記つけて、やすむ。

11月7日（木）やや曇る

甘藷（2貫）51円、里芋（200匁）4円40銭、ほーき（柔らかいもの1本）2円、みそ・醤油（特配）3円75銭

まだ、本当でない。頭痛が取れぬが、9時半頃、出掛けようとしたら、宮原さんがこの家を探しているところ。貞子さんと2人で、同級会の件についていろいろ相談して、一緒にお昼飯を頂き、連れ立って、壺川校方面へ下る。バラバラになって、私は一旦出社。

母上にいつか買って上げた山繭入りの裕（900円）、学生服（セル上だけ200円）、子供腹巻（100円）の3点を委託販売に出して見る。売れば良いが……。

殆ど仕事にならず。築山先生宅で遠山先生に合えて、嬉しかった。

11月8日（金）

十光園（貞子さんと一緒）と、三好みよさん（クラス会案内）

明日の父上の1周年墓参に溜子さんも行くとの事なので、十光園の帰りに竹部に寄って、打合せする。夕方帰って見ると、児等は明日はお休みとの事。午前中から出掛ける事にしよう。

11月9日（土）晴

父上1周忌

高江より伊萩→岩本実家、墓参り（みどり嫂、仏前の供養も墓参もせず）

1 周忌の父上のお墓は、お掃除一つしてない、侘びしいお墓、お父様、ご免なさい
朝からお弁当等の仕度等して、児等を七曲りに使いに遣り、パック社は判だけ捺して
広町へ廻る。隈府迄の切符を買って待ったが、瑠子さんなかなか来ず。大分遅れて、
寿美ちゃんを連れて来た。一足違いで10時のにも乗り遅れ。仕方なく高江行きと
買い換えて、11時半頃ので高江へ向う。途中でお昼を済まし、熟柿を買ったりして、
4時頃、伊萩着。すぐ岩本の墓参。実家に寄り、瑠子さん母子を残して、伊萩へ帰る。
母上相変わらず、拗ねて居られる。

11月10日（日）晴

岩本、伊萩、隈府、菊池神社参拝、荒木家墓参（隣の寺に直って居た）

「岩本みやげの唐芋」を荒木宅で炊いて貰った、夕飯はおいしかった

美津ちゃんも大分肥って来たよう

御飯の後片付けを済まし、貞子さんに頼まれた白米（2升）を求め、独りで岩本へ
行く。とじゅさんに木炭と甘藷1包み貰う。実家へ行くと、今朝は嫂も機嫌が良い。
思わぬところに西瓜を発見したと言うので、西瓜を持って（さつま芋、ひともじ等、
みやげを貰う）、嫂、朔郎も誘い、瑠子さん親子と伊萩へ帰る。

お母さんが唐芋の包み団子を作っておいて下さったので、みんなで頂き、西瓜と熊
本から持参したパイ缶を開けて、賑やかな食事を済ました。

昼過ぎ、隈府へ向う。途中、重荷に困っていると、バス（客用に非ず）が通りかかっ
たので、井手端まで便乗させて貰う。寺町に寄り、城山に参拝して、終電車で熊本
へ帰る。

11月11日（月）

出勤

11月12日（火）

出勤。2時頃帰り、明日のクラス会の為に、高浜さんでワッフル焼きを手伝う。ズ
ルチンを少し入れたと言うが、大分甘い。満寿夫さんがなかなかまめに働いて下さ
るので、大助かりだ。

11月13日（水）

大正6年本科卒同級会、尚綱高女クラブにて10時～5時

宮原（元野中）、谷山（元松岡）、高浜（元岐部）、石原、井上（元後藤シカ）、菊池（元村井チヨ）、堤

一寸出社ただけで、浄行寺町の角に待たせた貞子さんと尚綱校へ行く。10時と言ったが、なかなか集まらぬ。お昼頃になってやっと12名のクラスメート（大半は元の甲組生）と、先生が5名（築山、萱野、遠山、湯浅、永田）、楽しいお昼飯を頂く。皆の持ち寄りで、銀めしのお握りも有れば、天ぶら、万十、煮しめ、お酢の物等々、なかなかのご馳走だ。記念写真を撮って、散会。

内藤辰熊先生をお見舞いして、連れ立って帰る。上っ張りどぎる、花瓶を頂く。

11月14日（木）

配給の甘藷を受取る（11月の残全部）

早朝出勤。石坂弁護士の夫人を捕まえて、令嬢を引っ張り出そうとしたが、一寸難しそうだ。

芙蓉美容院を覗いたが、先生に会えず。早目に帰り、文緒に手伝って貰って、11月分の残りの甘藷11貫（55円也）を配給所から持ち帰り、ホッとした。

11月15日（金）快晴

朝早く出勤。六間町の荒木弁護士を訪問、長女啓子さんと30分ばかり話をして、写真を貰う。手取本町の裏手の林美容師を訪問、美顔と顔剃り専門だと言うが、感じの良い人だ。久しぶりに顔を剃って貰って、サッパリする。みやげに唐芋を貰い、尚綱校へ行って、築山の文野さんに南瓜を頂き、振り分けに担いで帰る。

11月16日（土）

午後、文緒と、遠山先生、菊池さん訪問

夜、夫来る

午前中、出勤。その前、11月分の米麦配給残り4キロ余り、全部を受取り。お昼、児等との約束で、学校へ寄ったら、春坊は明大対熊鉄の野球へ行った様子。文緒と藤崎宮の裏で弁当を済まし、明午橋から大江の通へ出る。遠山先生と、暫くお話し

て、蛤のおみやげを頂き、水前寺前の女子商業へ寄り、お芋を貰って帰る。

11月17日（日）驟雨あり

赤瀬へ行くつもりを停車場で中止する（雨の為）

夫は、昼過ぎの列車で、鹿児島（川内）藤田氏宅へ

夫が赤瀬へ連れて行くと言うので、お弁当を拵えて、9時54分発に乗ろうと、熊本駅へ急ぐ途中、雨になった。駅で模様を見た後、諦めて京町へ帰り、お洗濯を少しする。

夫は2時の列車で川内へ行く由。夫を見送って、高浜さんのバリカンで、2児に散髪してやった。銭湯は両方とも本日休業の由。

靴下の修繕などして、早目に夕飯を済まし、疲れたので、数日來の日誌だけつけて、早くやすむ。先日の風邪以來、時々頭痛がして、気持が悪い。

11月18日（月）驟雨あり

青木君、先日来欠勤

雑誌、未だ出来ず

11月だと言うのに、創刊号延び延び、社内の空気、思わしからず。

夕方、貞子さんと一緒に2児を連れて、久しぶり（子供には初めて）の銭湯に行く。

11月22日（金）晴

菊池へ、高永に寄る

昼頃、夫、来る。2児も文部大臣の來熊の為、授業中止となったので、大急ぎで京町へ帰り、仕度して、藤崎宮前から菊池電車で高江に向う。大分急いだが、真っ暗になった。

母上は岩本のおていさんところにお泊りとの由。

11月23日（土）

新嘗祭

岩本へ行く

和子さん、百ヶ日墓参

福本の村木氏宅に寄り、午後7時02分発の電車で、独り熊本へ帰る

春、文2人は伊萩に残す

朝飯を済まして。2児と岩本へ行く。実家に寄ると、朔郎が熱で寝ていた。

とじゅさんに炭を分けて貰いたいと思ったが、芋ほりに行ったとかで留守。仕方が無いので、おていさんに持参した中古の地下足袋と、新米2升と、交換して貰い、甘藷も少し貰う。

川内から、浩ちゃんと李季子さんが来ると言うので、煮しめなど作って、2時頃から独りで熊本へ向う。高永では律姉さんが大層待って居られたので、一緒に墓参して、お暇する。

帰宅したのは9時過ぎ、久しぶりに1人静かにやすむ。

11月24日(日) 晴

日曜なれど出勤

熊商の甲斐氏訪問(途中、礼拝)取材

子供が居ないので、早目に出勤。三年坂教会の礼拝は、大牟田教会の大塚翁(元魚行商人)の説教有りで、相当の感銘を与えた模様。

熊商の甲斐先生の妹を訪ね、暫くお邪魔して帰る。みやげにノートを2冊貰った。東外坪井の社へ寄り、帰宅。淋しく、簡単な食事をしたため、遅く迄夜なべ(繕い物)して、やすむ。

11月25日(月)

岩本祭

日暮れ、2児帰る、団子、お餅、お握りのみやげ有り

岩本祭で子供が帰らないので、朝、学校へ行って、先生に断る。

雑誌の見本が出来て来た。薄っぺらだが、あまり悪くはない。山川哲の漫画(表紙)はやはり良い、那須さんのもの良い。だが、内容があんまり貧弱だ。

夕方、2児を迎えて、賑やかに夕飯を頂く。

11月26日(火)

十光園訪問

湯浅先生を訪ね、高永の律姉さんの事を依頼。丹前綿を頂いて、帰る。

11月28日（木）

雑誌（『熊本バック』）を売り始む

12月1日（日）

2児同伴、上熊本駅に雑誌を売る

午後、十光園へ

12月2日（月）雨

夫、菊池へ帰る

12月4日（水）

竹森氏欠勤

永島夫人出家（荷物を持って同伴、河田氏宅）

12月5日（木）

竹森氏欠勤

12月6日（金）

午後、三年坂婦人会クリスマス集會に

加地氏宅に招かる

12月7日（土）

島崎（三賢堂、城西校、谷山）訪問

夕方、再び出社

宮原氏宅からたどんを持ち帰る

註

- 1 山口晶之介は、1923年7月に誠子が朝鮮人男性との間に生まれた子どもであり、誠子の長男である。晶之介は、誠子とともに大連に渡り、新京中学校在学時に熊本県の第五高等学校（現在熊本大学）に合格し、熊本へ行った。その後、東京大学へ進学し、1945年9月に繰上卒業、関東配電に入社した。敗戦時、晶之介は日本で生活していた。
- 2 山口義象は、山口家の3男、誠子の弟である。1946年7月9日に亡くなった。
- 3 谷山みどりは尚綱高等女学校の親友。
- 4 註3谷山みどりの長男である。
- 5 註3谷山みどりの次男である。
- 6 新京敷島高等女学校卒業後、在満洲国日本大使館関東局に勤務していたという。
- 7 誠子の尚綱高等女学校の恩師である。
- 8 高浜貞子は、誠子の尚綱高等女学校の親友である。註3谷山みどりと誠子との3人は、在学当時「尚綱校の三羽鳥」と呼ばれるほど仲が良かったという。
- 9 藤田諭吉。柳條の妹・李季子の夫。藤田家は、鹿児島県川内市の出身で、満洲の安東に本社を置く「藤田商会」を経営し、満洲各地に支店があったという。戦後は、鹿児島県川内市に引揚げた。藤田一家の李季子、諭吉、英吉、浩司、愛子、淳司はしばしば日記に出てくる。
- 10 朔朗は、誠子の甥、誠子の長兄・故山口豊稲・みどり夫婦の長男、当時は菊池農蚕高校の生徒だった。
- 11 誠子の親戚である小野家の従姉である。
- 12 註11瑠子の長女である。
- 13 山口巖は、山口家の次男、誠子の弟である。鞍岳に山小屋を建てて独り住まいをしていたことから「鞍岳仙人」とも呼ばれていたという。
- 14 山口家の長男（山口豊稲）の妻、誠子の嫂で、註10の朔郎の母である。
- 15 岩根実記は誠子とは同郷である。
- 16 アメリカ・ルーテル教会の宣教師である。
- 17 誠子の尚綱高等女学校の恩師である。
- 18 永島始は熊本県海外引揚者罹災者救済会長、熊本パック社社長である。
- 19 尚綱高等女学校は誠子の母校である。

20 誠子の回想ノート『終戦のあとさき——日記とメモから』によると、上海の新聞社での勤務経験があったという。

21 安武和子は柳條の長兄（安武萱夫）の長女である（図3）。萱夫が早逝したため、その妻・律と母子2人の家庭であった。和子は、名古屋の金城女専を卒業後、伯父・柳條夫婦を頼って満洲に渡り、哈爾濱の女学校で教師として勤務していた。敗戦後、同校の学校長は人民裁判にかけられ、その際、和子は「学校長だけの責任ではない。私も同じ責任が有るので、一緒に行きます」と、学校長と一緒に旧被服廠跡で銃殺されたという。

22 註21 安武和子の母である。

23 山川哲は戦前から戦後に亘って活躍した漫画家である。

24 マーサ・B・エカード（1887 - 1969）、アメリカ・ルーテル教会の宣教師である。

25 市川寿美蔵、歌舞伎役者の名跡である。

26 長與善郎（1888 - 1961）、東京都生まれ、東京帝国大学を中退し、1911年『白樺』同人となる。戯曲『項羽と劉邦』、小説『青銅の基督』などで知られる。『白樺』廃刊後は『不二』を主宰した。1960年自伝『わが心の遍歴』で読売文学賞。芸術院会員。

27 誠子の尚絅高等女学校の同級生である。

28 山本実彦（1885 - 1952）、鹿児島県生まれ、日本大学法律科卒業後、やまと新聞記者、門司新聞主筆を経て、東京毎日新聞社長となる。1919年には改造社を創立し社長に就任。東京市議会議員、麻布区会議員、大東亜顧問、日本協同党委員長、協同民主党委員長などを歴任。

29 大橋喜美子、1914年石川県生まれ、1932年金沢第1高等女学校卒業後、1934年には共同薬品株式会社社長の高山昇と結婚した。

30 山下ツネ（1899 - 1987）、熊本県出身、1946年には第22回衆議院議員総選挙で熊本県から無所属で立候補して当選。当選後は国民党を経て、日本社会党へ入党。